

日本

# ハンザキ研究所ニュース 2013(6) : 通巻 No. 90

発行 2013年6月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良



## ウグイス

“ホーホケキョ、ケキョケキョケキョ”とウグイスが盛んに良い声で鳴くシーズンが来た。4月ごろの鳴き始めはあまりうまい鳴き方ではないが、次第に長くうまくなって行く。鳴き声は再々聞くことができるのだが、姿の確認はできない。ところがなんと毎日何回も行き来する入口の道のわきにあるアセビに巣をかけていたのである。数メートル位に近づくと巣から小鳥が飛び出すことを繰り返すので気が付いた。それも毎回同じコースへ飛び去るのだが、カラーフェンスの網目を抜けて矢のような猛スピードである。目の所に黒いすじが見えたのでヤブサメかと思ったが、親が留守の間に巣内を覗いて見て感激した。真っ赤なルビーのような美しい卵を見たのだ。すぐに鳥の巣と卵の本を引っ張り出してヤブサメの所を探したら、お隣にウグイスの巣と卵の写真があった。



ウグイス

図鑑の説明はズバリはっきりとウグイスであることを確信させるものだった。林道に面した樹木にススキなどの枯れ葉を使って巣をかけるということだ。そう言えば構内のススキをカットして近くに積んでおいたのが功を奏したのだろう。それにしても、林の中ではなく、すぐに逃げ出すことができる道などに面したところに巣作りするというのは、藪ぐりの得意なウグイスらしからぬことだと思う。

眼の良いウグイスはあっという間に巣を脱出して飛び去るので写真が撮れない。そこで無人カメラを設置しておいたら1コマだけうまく映ったのが上の写真だ。ウグイスはメスが16日間抱卵し14日間の育児をするという。7月11日に雛を確認できたが16日まで出かけていて観察できなかった。そして16日には雛の姿もメス親もいなくなっていた。野生動物の多いハンザキ研だが、細い木を登れるのはシマヘビかなと思うが残念なことだった。





写真1 道路に面したところに巣が (円内)



写真2 ウグイスの巣



写真3 ウグイスの卵



写真4 屋根の修理ボランティア



写真5 草引き中のボランティア



写真6 アブの大群に囲まれた車 (アブの一種) 円内





写真7 水槽内でのモリアオガエルの産卵



写真8 塩焼き前のアユ



写真9 シカに食われたタケニグサ



写真10 キセキレイに標識を付ける



写真11 鳥類の標識用具一式



写真12 銀谷工房のハンザキ君

## シカによる食害

シカが増え過ぎている。まさにハンザキ研の周辺を見てもその影響は明瞭だ。このままでは日本の植生が変化してしまうという警鐘が鳴らされている。少し前まではススキは食われなかったが、真上からガブリと食っている跡が観察される。驚いたことには毒草として知られているタケニグサまで食った跡が見つかった(写真9参照)。現場を見たわけではないが、アザミの食われ方と同じなので、多分という考えと食草が少なくなっていることから間違いないだろう。しかし、呑みこんだかどうかは分からないが、経験のない子ジカが空腹に耐えかねて食いついたのではないだろうか。雪が消えると子ジカの白骨がハンザキ研の周辺でいくつも見つかることから、背の低い子供のシカは背の高い樹木の葉に届かず、冬季には飢え死にして淘汰されていくのだろう。

兵庫県では、昔はメスジカが禁猟の時代があって、次にこれが解禁されたが時すでに遅く、大量に増えてしまっていたのだ。県の自然環境課では年間のシカ駆除目標数を 35,000 頭に設定しているそうである。兵庫県内の生息推定数は 7 万頭とか 14 万頭と言われている。生息数の半分も殺してしまうという方針で、環境行政としては矛盾しているような面もあるが、狭い国土内ではそのバランスを取るのも職務となっている。それでもシカによる農業被害も大変で、行政が田畑を金網で囲う助成を実施している。ネットでは咬み破って侵入されるからだが、当地では金網だらけとなって来た。丹精込めて栽培した作物が一晩で全滅したりするのでいたしかたないことだ。

ハンザキ研の山向こうにある丹波市のある地域では、これらの金網やネットが見当たらないので住民に聞いたところ山際に金網があり、シカが降りて来ることができないようにしてあるということだった。手数がかかるが山仕事で林道に入るところには門があって開け閉めしているそうである。増えすぎたヒトとシカとのせめぎ合いは、まだまだ続いていくことだろうが、いったん増え過ぎるとこれを駆除する作業も大変だ。猟師の不足、高齢化と言われるが、駆除したシカ肉がほとんど流通していないことも問題である。前歯か尻尾を持参して駆除の証として助成金が出る仕組みになっているようだが、山の中を歩き回って仕留めても、その現場に行くのにも体力が必要になる。

猟期も 11 月 15 日から翌年の 2 月 15 日となっているが、延長されることもあるものの肝心の猟師が絶滅危惧種ではあまり期待できないと思う。ハンザキ研の周囲ではシカの姿が多少減ったように思うが、餌が無くなれば餌を求めて移動していくことだろう。六甲山の方ではシカが増えてきたというニュースがあったが、シカも生きていくには食わねばならないので食べる植物を食いつくした地域からの移動もあるのではないかと思う。駆除したシカは埋められたり重油で燃やされたりしているという。先日、ラジオを聴いていたら、動物園の肉食獣への餌としての活用が考えられているということだった。オーストラリアから増えすぎたカンガルーが駆除されてその肉を輸入して肉食獣の餌としていると聞いたことがあったが、いずれにしても検疫などの対策が整えられなければならないだろう。

## シカに食われない植物

食える植物は何でも食ってしまう困ったシカの話が問題になっている。ハンザキ研の南東の山は落葉広葉樹林であるが、この林床には植物が無い。きれいに整備してありますねと言う感想を述べた方もいたが、これがシカ食害の現場なのだ。毎朝のパトロールでは必ずと言ってよいくらいシカの警戒音を浴びせられていたのが、このところほとんど無くなってしまった。食う物が無いのだからシカもやってこないということだ。平成 4 年に閉校になってから十数年間は校庭の草をシカが雑草？を刈り取ってくれていたことになる。

この校庭の花壇や周辺に残されていた植物はシカが食わない種と言うことになる。園芸品種であるグラジオラスは雑草よりも強い生命力を見せる。食われない上に球根に多数の種子かとも思えるほどの小さな球根を多数つけるからだ。肥料もやらないのに毎年多数の白花を咲かせる。シャクヤクやベゴニア、バラも残っている。野生のものではノイバラが大きな木になって沢山の白い花を咲かせ昆虫に蜜を提供し、赤い実を付けては小鳥のえさとなっている。そのおかげで鋭いとげを備えたノイバラが生えて厄介者となっている。オタカラコウも食われずにあちこちに艶やかな葉を茂らせる。カラーフェンスに巻きついてアケビやミツバアケビはシカの届く範囲には葉が無いので食われたのであろうか。フキも現在は増えてきたが、これは防獣柵で校庭を囲んだ結果かと思う。その他オダマキやヤマジノホトトギス、ササユリ、ワサビも生き残っている。へ（尻）クソ（糞）カズラというひどい名を付けられた蔓植物、ハーブ（ハッカ？）、ギボウシ、ウツギ、タニウツギ、ミツマタ、ヒメコウゾなども目立つ植物である。校庭に築山ビオトープや湿地ビオトープ、伐採木ビオトープそして全く手を入れない雑草（？）ビオトープを作って観察をしている。そして、樹木や草をできるだけ多く囲い込んで生物多様性と共に朝来群山の自然植生を残していきたいと考えているところです。

朝来市の面積は約 400 平方キロメートルでその内 340 平方キロが林野で 84% を占めているという、そしてスギやヒノキの植林王国である。初夏の新緑の時期には黒い植林地帯と自然の植生部が明瞭に区分されるし、秋の紅葉シーズンも同様である。自然のままの植生が残されていればどんなに素晴らしい光景を見せてくれたかと想像するしかないのは残念なことだ。無論、国策としての植林であるが、現在ではスギ・ヒノキを伐採して落葉広葉樹を植える運動が各地で実施されるようになったが、その一方で相変わらずスギ・ヒノキの苗が植えられる例が多いようだ。何とも矛盾した現象ではないかと思うが、林野行政ではどのような考えで指導しているのだろうか。山の急斜面に植えた苗木をシカの食害から守るために金網が張り巡らされているのを見ると何とも複雑な気分になってしまう。

間伐材や道路にはみ出しそうな樹木の伐採されたものはそのまま放置されていることが多いが、これが大雨の時に大量の流木となって甚大な被害をもたらしていることもよく知られた事実である。誰にでも分る理屈だが、なんて言ったらいいのか・・・ 何でもそうだがこれらの放置されている資源の活用を考えていかねばならないのだ。



## ハンザキ研をめぐるスター ⑱

## アユ

アユは日本の河川で獲れる魚の中で最も美味であると言われている。米国の研究者が悔し紛れに自国の魚に次いでうまいと言ったというエピソードがある。種苗生産が可能になる前には、琵琶湖産のコアユ（小アユ：10 ㎝くらいにしか成長しない）が全国の川へ放流されていた。琵琶湖畔の彦根市内にはこの小アユを他の河川に放すと普通のサイズに成長することを世に知らしめた石川千代松博士（東京帝国大学教授）の業績を顕彰する胸像が建立されている。石川博士はハンザキの近代的な生態調査の先鞭を付けた方でもある。

各河川の漁協はそれぞれの解禁日を決めており、早いところでは加古川の鬮龍灘が 5 月 1 日で最も早く、季節の話題として毎年ニュースで紹介される。我が NPO 法人の奥藤事務局長は、還暦を過ぎたら仕事は定年にして趣味のアユ釣りに命をささげると宣言した。事実、足腰が衰えないように毎朝、黒川ダムへの山登りを日課としているという。6 月になると日本海側の河川が解禁となるが、日が近づくとそわそわして落ち着かない日々を過ごしている。そして、地元の市川では解禁日が遅く 7 月 1 日である。最近では下流にある生野ダムで造られた銀山湖で冬を越した地元再生産型のアユが遡上するようになってきているという、素晴らしい話を聞いた。陸封されたアユが、銀山湖を海代わりに行っているということである。このような現象は琵琶湖が最も有名なことであるが、そのためには親アユが生き残られるようにしなければならない。

ハンザキ研に接する範囲を禁漁区にしてくれるように漁協にお願いした。ハンザキをアユの天敵と考えている組合員の方からの反対もあったようだが、ご理解を頂けた。禁漁区の設定は子供たちが河川環境に親しむ機会として魚とりは必須だと考えてのことだった。しかし、その結果はアユの再生産にも寄与することになったと思っている。市川では 9 月の第一日曜日の正午から網入れ漁が解禁になる。せっかく釣り人から生き延びていた親アユが網によって一網打尽にされてしまうのだ。禁漁区域には養殖されて群れることが当たり前になったアユが残っている。これらの親アユが産卵して孵化した稚魚が人工湖である銀山湖で冬を過ごして遡上してくるにつながっている。

禁漁区はこのような効果をもたらすのであり、河川全体にも良い効果を与えるのである。目先の釣果だけに気を取られては、かえって資源の枯渇をもたらすことになるのだ。アユは一日に一回だけ食事をするという。これは一日中餌を食っているということだ。石の表面に繁茂した付着藻類を櫛状の歯でこすり取って食べるので、アユのいる場所の川底の石の表面には二枚のササの葉のような食み跡が付いている。一匹のアユは餌の確保のために 1 匹四方の縄張りを作る。大量のアユが放流されると縄張りを形成することができなくなり群アユとなってしまいうさだ。頭が小さいアユは養殖物と言われるが、脂肪分の多い餌で育てられて、頭部後方に脂肪が蓄えられて盛り上がるため頭が小さく見えるのです。焼くとイワシ以上の煙が出るが、あれは本物のアユではない情けない物体なのだ。

## モリアオガエルのいい加減な産卵生態

これまでも何回も取り上げてきた話題である。今シーズンは大量殺戮のニュースをお届けした。このページでは水槽内での産卵についてのお話である。ハンザキの保護飼育プールの周辺では樹木が無くてもモリアオガエルの産卵が多数観察できる。気の毒に思っすり減った竹箒を立てかけておくと集中して産卵にやってくる。産卵期が終わりに近づいてきたある日、屋外アクアリウムのコーナーの空き水槽内に泡巣を見つけた。水槽の底には数センチの水が残っていたのであるが、蓋のわずかな隙間から入り込んでの産卵である。何でこんなに無理なところに産み付けるのだろうかとか疑問に思ってしまう。しかし、カエルにとってはきっと何かメリットがあるのだろうか、理解しがたいところだ。水槽内に入ればカラスやヘビ類からのアタックを避けることができるのかもしれない。

屋根の下の水槽内では降雨による孵出の援助を受けることはできないが、無事にオタマジャクシが沢山泳ぎ出したので、外の池に移動させた。餌になるものが全くない水槽なのである。カエルたちは本当に子孫を残そうとしているのかどうか考えさせられた事例である。

## ヒキガエルの産卵場の調査とアブの大群

梅ヶ畑のヒキガエル産卵・孵化の様子をスタッフと観察に出向いた。ハンザキ研から 2 ㎞ほど上流、支流の長野川沿いの山際の水溜りである。ここは陽光の全く届かぬ林道の脇にある長さ 5 ㍍、奥行き 1 ㍍で水深は変化があるが最深部で 30 ㍍くらいである。ハンザキ研周辺のヒキガエル産卵場の中で最も遅い産卵・孵化・変態上陸が見られる場所である。

舗装もない石ころだらけの細い林道を進むうちに、黒塗りの車体の周辺に無数のアブが集まって来た。これではうっかり車外に出ることができないなと思うくらいの大群で恐ろしくなった。だが、意外なことには攻撃してくることは無く、体に止まっても血を吸われることが無かった。アブと言えば大型のウシアブには毎年のようにやられて大きくはれあがってかゆみが長続きする厄介者と言う先入観があった。このアブの種名は知らないが何を餌にして生きているのだろうか？ また、黒塗りの車体に引き付けられたのか、車の温度に集まって来たのかも分らない。アブの専門家が来た時に聞いてみたい疑問の一つである。

ハンザキの調査で、林道を歩いていた時に多数のアブに付きまとわれて恐怖を覚えたことがあった。追い払っても追い払っても体の周辺でブンブンと飛び回って襲いかかってくるので、ササを折ってはたき代わりにして振り回して追い払いながら下山したのだった。このアブの名も分らないままである。スズメバチそっくりのアブもいたり、体に止まった途端にチクリとあつという間に血を吸って飛び去る種類もいる。まったくヒトに害を与える生き物も多いが、これも食物連鎖の一環なのかもしれない。でもかゆいし痛い。

## ハンザキ研日誌

2013年6月

- 1日 一棟貸し民宿“まるつね”周辺で調査（水戸市からのハンザキオタクさんと）  
3 個体測定
- 3日 ・田口理事、夜間調査 11 個体測定、すべて再捕  
・モリアオガエルの大量死亡水田調査、死体・生体共になし  
・ヒキガエル調査（梅ヶ畑・大明寺）
- 6日 生野中学1年生見学に 35 名と引率 4 名
- 7日 豊岡河川国道事務所の北近畿自動車道委員会（神戸市内で）
- 9日 ・作業ボランティア 6 名参加  
・ヒキガエル調査（大明寺）
- 12日 ヒキガエル調査（梅ヶ畑）
- 15日 森 哲京大教授と米国ユタ州立大学 A.H.Savitzky 教授夫妻来所
- 16日 野鳥調査で脇坂夫妻来所、5 名参加（ホトトギスの幼鳥確認）
- 18日 姫路河川国道事務所の揖保川水系流域委員会最終回（14 年間 29 回の会議）
- 22日 ・兵庫水辺ネットワーク研究会で講演（姫路市立水族館にて）  
・岡田副理事長と田口理事アメリカ・ハンザキのシンポジウムへ
- 25日 ・キノコ定期調査、横山・宇那木両先生と 2 名参加  
・ヒキガエル調査、車の外にアブの大群（梅ヶ畑）  
・ウグイスの巣を見つける
- 26日 黒川ダム放水の放水（ポンプ・ピットに土砂流入）
- 27日 関西電力黒川ダム湖内のハンザキ調査について討議
- 29日 ・事務局会議 12 名出席  
・蛍の産卵用ケージ設置、10 匹収容  
・夜間、アンコ淵観察用モニターに 11 羽のカルガモ一家登場  
・環境省近畿事務所の横田野生生物課長他 4 名夜間調査（13 個体内 2 個体新規）
- 30日 ・公開見学会 5 組 16 人参加  
・ウグイスの巣にルビーのような 5 卵確認

.....

## ハンザキ所長のツブヤ記録

ハンザキ研の自然誌を記録して残したいと考えているが、陸上の植物や動物、昆虫など多岐にわたる生物について自分で調べるといくら時間があっても足りなくなる。おまけによく似た種については同定に自信が持てない。そこで専門の方々の力を借りることになる。しかし、ウグイスの卵にはその美しさに感激してすぐに何者であるのか知りたくなつたのである。他人に聞くのはずるいと言われるがこんな事情があるのです。よろしく！！